

ターニング・

女が別れを告げるとき

ポイント



円より子

yoriko madoka

新潮社

女が別れを告げるとき

ターニング・ポイント

円より子

Yoriko madoka





ISBN4-10-379401-1 C0093

©Yoriko Madoka 1991, Printed in Japan

ターニング・ポイント

——女が別れを告げるとき

一九九一年一月二〇日印刷
一九九一年一月二五日発行

著者 円より子^{まどか}

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(03)三二六六一五一
編集部(03)三二六六一五四一

郵便番号 一六二

振替東京四一八〇八

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛
お送り下さい。送料小社負担にてお取替えい
たします。

ターニング・ポイント — 女が別れを
告げるとき *

目次

第一章 目覚める季節

夫のサブではない、自分自身の人生を意識する時

深い河

9

別れのプロセス

35

赤い紅茶茶碗

45

第二章 家族の意味合い

役割のみの夫婦に子供という絆は有効か

薄曇りの日々

57

子供の気持

89

大岡裁き

99

第三章 アイデンティティ喪失

妻という
危い自我

見失ったもの

111

口紅

133

神頼み

143

誤算

153

第四章 妻と母の間で

良妻賢母の習性を捨てられなかった女たちの逆襲

旅立ち

165

宅配便

193

逆転

203

第五章 六十代のマイ・ウエイ

今こそ第二の青春

一枚の紙切れ

215

あとがき

240

装画
梶原由美子

ターニング・ポイント

—— 女が別れを
告げるとき

第一章

目覚める季節

深い河

深い河

夏の終わりを惜しむような蟬時雨。サラ・ボーンのセプテンバー・ソング。涼子は揺り椅子にからだを委ね、冷えたビールを飲む。

風が心地良い。窓外の木々が大きく揺れている。その向こうに深緑の山と薄墨色の山々が広がる。

東京タワーとビル群を見下ろしながら仕事をしている時には得られない安らぎがここにはある。さえぎるもののない空の広がりや山の稜線、風のそよぎが、これほど人の心を豊かにするものかと、涼子は今更ながらに感嘆する。

二十畳ほどの居間は木の床だが、片隅に四畳ばかりの畳の間を設けた。その壁一面に、書がかかっている。

十年近く師事している書道の師が半年ほど前に銀座で「墨」の個展を開いた。その折にどうしても欲しくなり、無理を承知で頼みこんだ作品である。

ひとつひとつの作品を我が子と慈しみ、売買はしない師だったが、その作品と涼子との養子縁組を快諾してくれた。

放下。

壁にかかる書は「放下ほうげ」と読む。師の友人でもある栗田勇氏の解説によると「人間の悟り（生きて在ることの究極の充実感）を、道元は逆に「放下」と言い、一遍は「捨ててこそ」、良寛は「任運」と言った」。

朝早くに目が覚めて、陽射しの強くないうちに涼子は裏山に登った。軍手と花鋏はなばさみを用意していき、まだ穂の開かないすすきを十数本切りとってきた。それを、笠間に住む女性の陶芸家が焼いた、備前に味わいの似た浅い花器に投げ入れて、書の下においた。

揺り椅子と、大きな一枚板のテーブルと、古いステレオにLPが少し積んであるだけのがらんとした部屋が、「放下」とすすきで見事にひき立つ。

離婚して人生にひとつの区切りをつけた涼子は、生活もシンプルに徹しようと思っていた。というより、物にこだわりがなくなっていた。それなのに、この書に執着した自分がおかしかった。だから頼んでおきながら、駄目でもいいとあきらめているところがあった。だが今、やはりいただいて良かったと、涼子は飽きずに眺めている。

既に綾のハイスクールは新学期を迎えているが、落ちついて勉強を始めているだろうか。一年前、急に綾はカナダの高校に行きたいと言った。既に志望校は決まっていて、担任から太鼓判を押されていたのに、急に外国へという気になったのは自分たち夫婦の別居が影響したのだろうか。

「国際関係の仕事がしたいの。ODAとか地球の汚染を国際規模で守ることとか」綾は日本の高校はつまらないと言った。大学受験のためだけの勉強なんかしたくないのだとも言った。

幼い頃から主体的に生きるよう育ててはきたが、まだ中学三年生である。いずれ留学してもいいとは思っていたが、早過ぎる気がしないではなかった。

別居中の夫は案の定、反対だった。

「君とくらしていることで疎外感を持っているんじゃないだろうな」

「疎外感ってどういうこと？」

「多感な年頃だし、あいつは君よりずっと繊細だからね。母親に愛人がいることに耐えられなくて逃げだすんじゃないか」

「まさか」

反論しようかとも思ったが、とうの昔に夫には話しても無駄という思いができていた。

「前から言おうと思っていいたんだが、綾をひきとりたいたんだ。どうだろう。君の仕事場に

居候みたいにくらしていれば、彼女だって勉強もできないし、落ちついてくらせないから、外国に行きたいなんて言いだしたんじゃないかな」

「私とくらすと決めたのはあの子よ。でも、そうね、もう半年も経っているから氣持が變わつてゐるかもしれない。交代するのも悪くないわね。綾に聞いてみたら？」

そんなやりとりがあつてから、夫と綾は数回に渡つて話しあつた。

涼子は涼子で、綾の留学費用の捻出の算段をし、綾が調べて留学したいというハイスクールとその町について、知人らに問いあわせていた。綾が思いつきで物を言う娘でないことは涼子が一番良く知っていたからだ。

結局、夫も綾の留学を認め、留学費用を折半しようと言つてきた。

「六月まではどうするの」

「どうするのって」

「パパのところで暮らすんじゃないの」

「ああ、そのこと。パパと一緒にくらしてくれて言つた時はちよつと迷つたのね、私も。でも、あの人つて一緒になんてくらすと、私がカナダに行つたあと、ガクツと来そうじゃない。やつとママと私がいなくなつても平氣になつたところなのに。そういう風には言わなかつたけど、『私が留学した後、平氣？』って聞いたらわかつたみたい」

綾は中学三年の十月から語学学校に入り、今年の六月半ば、成田を發つてカナダへと向

かった。二ヶ月ほどは夫の知人の家にホームステイし、九月の入学と同時に寄宿舎に入る。その手続きが一人では心配だと夫は綾についていった。

涼子は「クリスマス休暇に行くわ。一緒にスキーしましょうね」と元気に綾を見送り、「心配じゃないのか」と夫にあきれられた。

心配である。寂しいとも思う。さっぱりとしているように見えて、人一倍、情の強い涼子だ。独占欲も強く執着心もある。だからこそ「去る者は追わず」と心に決めて生きてきたのだ。

綾に対しても、考えつく限りの配慮で、留学準備を整えた。後はもう離すしかない。遅かれ早かれ巣立っていく娘である。それがたまたま世間一般より三年ほど早かったというだけではないか。

綾を送りがてらカナダに渡った夫は、ニューヨークとシカゴにも寄って、十日ほどで戻ってくると、すぐ涼子に連絡してきた。

夫はハイスクールや寄宿舎、そして街並や、隣の都市のホームステイ先の家族まで写真に撮り、その現像もすませてやってきた。

いそいそといった感じでやってきたのが、涼子には不思議だった。

綾を送って戻ってきたら、届に判を押してもらうことになっていた。夫は「わかった」と言ったものの不承不承だったはずだ。

「届のことだけど」

綾が思った以上にしつかり何でもやれることなど得々と話していた夫は露骨にいやな顔をした。機嫌良く捺印させようと思っではいたのだが、よりを戻したい気が見え見えの、夫婦気取りの長話にいい加減うんざりしていた。

「はい、届出用紙とボールペン」

夫の気持を無視して明るい声で、用紙とボールペンを差し出した。

「いいよ、万年筆があるから」

黒の極太のモンブラン。少し懐かしい気持がよぎった。ワインは何年物、万年筆は何、とあらゆる物に自分なりのこだわりを持つ彼に、ある種の憧憬どうひいを持った若い季節もあった。共働きの結婚生活が始まった途端に、確固としたライフスタイルも気取ったえせいンテリ趣味にしか思えなくなったのだが。

「困ったな、印鑑忘れてきたよ」

署名欄まできて夫はそう言った。

「あるわ、これ使って」

引き出しから朱肉と共に三文判を取り出した。

「同じ判じゃまじいんじゃないか」

「私のは別よ」